墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（八・完）第四編下帙

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19940

明治大学教養論集　通巻五三七号（二〇一八・一二）一三七―一六七頁

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（八・完）――第四編下帙――

神田正行

凡例

一、仮名は一部を除いて、通行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。

一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。

一、文章を読む順序を示した「合印（あいじるし）」は、その多くを形の近い記号で代用した。

一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を施した。

一、見開きが改まる位置には、「（4ウ・5オ）」の形で丁数を示した。

一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三国志』の相当する人物を【　】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼一印以下は、稿者による注記である。

一、影印ならびに翻刻の底本は、福井市立図書館蔵本（文60/4-4/1-16）である。

《第三冊　表紙》

乙未新刊（ラベルド）　孫権【▼駒絵内。中央は本作の権化姫】

雪麿作　国貞画　喜鶴堂梓（カスレ）

傾城三国志第四編（けいせいさんごくしだいしへん）　下帙（カスレ）上冊

▼判読には、教団氏「尚書省三國志部」に公開されている本編の画像（https://drive.google.com/file/d/0B2JPhyGFtLO6d0IPRUdac3o5SDQ/view　最終確認、平成三十年九月三日）を参照した。

《第三冊　前表紙見返し》

雪麿作　下帙上冊

三国し

国貞画　喜鶴堂梓

（五）

かくて玉梓【公孫瓚】はうち喜び、もろ共に寨に帰り、酒肴を調へて、厚く群雲【趙雲】をもてなしたり。

さてその次の日より初糸【袁紹】・玉梓、互ひに討ちつ討たれつせしが、そが中にもやゝもすれば、玉梓しばゝ負けぬるを、群雲いたく働きて、初糸を切り靡けし所へ、三国にありし、玄妙【劉備】・関路【関羽】・飛鳥【張飛】らは、此事を聞くと等しく、来たりて玉梓を助

（21オ　宴席に侍る関路と飛鳥　※次図と一連）

けつゝ、いと手痛く働くものから、初糸魂を天外に飛ばして、逃げんとする時手に持ちし、刀を地上にとり落とし、慌てふためき逃げ去りて、辛く命を逃れけり。

玉梓は手勢をまとめ、寨に帰りてその日まづ、玄妙・関路・飛鳥らを、労ひて言ひけるは、▽／▽「玄妙主の来たり給ひて、かく救はるゝにあらざれば、いかでか我儕安穏ならんや。右へ／左の中より偏に各々の力なり」と、その骨折りを謝し終はり、群雲を引き合はするに、玄妙・群雲初対面の、此時より相互ひに、その人柄を愛で思ひ、心の底に頼もしと、思ひ初めたりけるとなん。

○さても初糸はこの攻め合ひに、いたくうち負けたりければ、次へ（21オ）／続き己が寨を守り固めて、争ふ事をせざりければ、互ひに睨み合ふのみにて、日ごろ経る事やゝ久し。

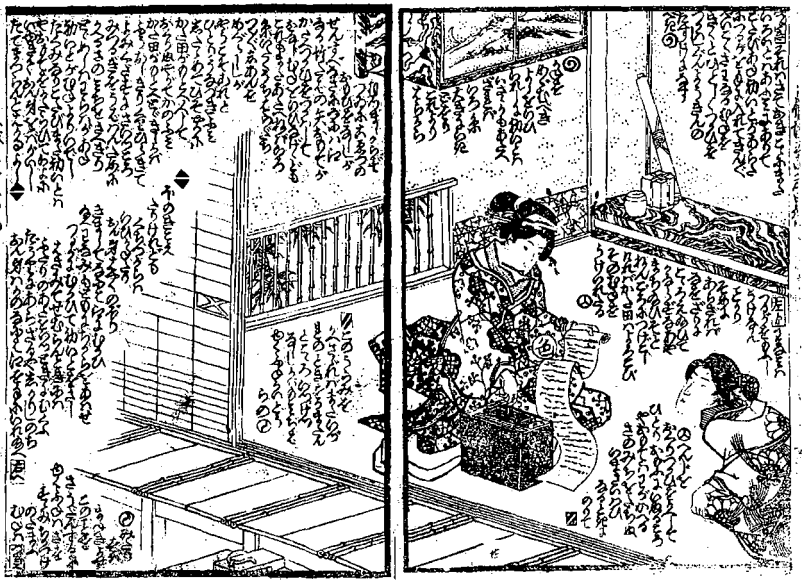
しかるに此事都にも、早く聞こえたりければ、ある時杏【李儒】、董根【董卓】に説いて言ふ、「初糸と玉梓は、今の世の優れ者なり。この頃越前岩川【磐河】にて、互ひに挑み争ふ由、今姫上の仰せを借り、人をもて彼処

（21ウ・22オ　玄妙、群雲との別れを惜しむ）

に遣はし、彼らに和解を勧むるならば、二人はその徳に感じて、必ず局に従ひなん」と、言へば董根うち喜び、すぐさま協姫【献帝】に、この事を聞こえ上げて、日岡【日磾】・岐岨【趙岐】といふ、二人の局をば使ひに立て、岩川へ遣はして、和睦をばとり結ばしむ。

かゝりければ初糸・玉梓、喜ぶ事限りなく、互ひにいと睦ましく酒宴を開きて、日岡・岐岨を、もてなすこと大方ならず、二日三日逗留させ、やがて初糸・玉梓は、かの二人を都まで送りて、己らも姫上に目見えをなし、董根に会ふて、此度の扱ひを謝しにける。

大桑の玄妙は、故郷三国に帰らんと、群雲に別れを告ぐるに、玄妙群雲が手を取りて、涙を流し別るゝに、忍びかねて見えけるに、群雲も目をしばたゝき、ほといふ息を吐きながら、「妾先頃玉梓主は、今の世の■／■優れ者ぞと、思ひしかどもかの人が、する所をつら〳〵見るに、初糸らの輩なり。言ふに足らざる人柄よ」と、いと悔しげに志を、述ぶれば玄妙慰めて、「御身しばらく心を固めて、まづ玉梓に仕へ給へ。必ず日ありてまた



（22ウ・23オ　色糸、堅田に文を認める）

妾と、面を合はする事あらん」と、言ひつゝもはふり落つる、涙拭ふて別れしは、これ天縁と知られたり。玄妙は三国に帰り、また玉梓は、群雲ともろ共に、篠原へ帰りし後、しばらく此方に話なし。次へ（21ウ・22オ）

続きそれはさておきこゝにまた、色糸【袁術】は近江にありて、此度姉初糸が、新たに敦賀を手に入れて、金銀米穀多なる旨を、聞くと等しく使ひを遣はし、軍用金の助けになすべき、○／○金を恵むべき由を言ひ入れしに、初糸は、いさゝかも与へざれば、色糸多きに憤り、これより姉妹睦ましからず、つゐに胡越の思ひをなししが、せん術なさに難波江なる、竹束の矢表【劉表】が、方へ使ひを遣はして、同じ旨を言ひ嘆けども、これもまた与へねば、色糸いたくうち腹立ち、つくゞく思案を巡らしが、「やうこそあれ」と一人頷き、文認めて密やかに、堅田【孫堅】が許へ人して送りぬ。

やがてかの文堅田が許へ、届きしかば封おし切り、繰り開きて読み下すに、「先つ頃御剣を、奪はん為に帰るさの、道を遮り止めしは、妾が姉初糸が、胸より出でし

（23ウ・24オ　堅田、三女将に諮る）

たくみ也。此度また初糸は、矢表を語らひて、伊予にい行きて御身をば、害し奉らんと謀る由、◆／◆仄かに聞こえたりけれども、口づからは言ひかねたり。御身早く上り来まして、難波江に向かひ給へ。わなみも共に力を合はせ、敦賀に向かひて初糸を、さし挟みて攻むらん時には、二人の仇を一時に、報ふ道理にあらざるや。然りし後、御身は難波江を手に入れ給へ、右へ／左より わなみは敦賀を申し受けなん。事かりそめにあらざれば、等閑に心得給ひて、必ずな過ちし給ひそ」と、懇ろに告げ来しければ、堅田は喜びその旨を、受け入れたる○／○返事を送り、使ひを帰して一人思ふに、「往ぬる頃矢表は、我が帰るさの道を絶ちぬ。今幸ひなる時に乗りて、■／■この怨みを返さゞれば、またいづれの時をか待たん」と、心一決なししかば、黄葉【黄蓋】・行船【程晋】・海棠【韓当】らの、○／○三人をば招き寄せ、この事を相談するに、行船は座を進み近付け、「宣ふ旨は 次へ（22ウ・23オ）／続き 心得ぬれど、先に色糸の所行を見るに、偽り多き性にして、言葉をまことゝなしがた

し。こゝらに御心付かれしや」と、言へば堅田はほう笑みて、「妾自らかの時の、仇を報ひんと思ふのみにて、必ず色糸が助けをば、望むにはあらざるなり」とて、黄葉に言ひつけて、戦の用意をせさせつゝ、「よき日を選みて首途せん」と、心構へぞ様々なる。

しかるにその風聞を、矢表の方に聞知りければ、大方ならず驚き呆れて、急ぎかの山颪比良峰【蒯良】、雪崩の越路【蒯越】、七宝の瑁【蔡瑁】なんどを招き集めて、矢表言ふやう、「伊予の堅田は先つ頃、我儕が為に帰るさの、道を遮り止められたる、古き怨みを報はんとて、その心構へをなせる由。いかにしてかはよからん」と、言へば比良峰うち頷き、一深くな思ひ屈し給ひそ。彼処にをる、夕づくひ黄昏【黄祖】といふ者に、数多の手の者を預けつゝ、これを先駆けになし給ひ、御身自ら難波江なる、あらん限りの女輩を、従へ給ひて助けとならば、堅田は遥かの波路を隔て、伊予にありて便り悪かり。波濤をしのぎ此方へ来たり、いかでかその威を輝かさん。片腹痛き事なり」と、事もなげに言ひ罵れば、矢表「しかり」と頷きて、言ふがまに〳〵従ひける。

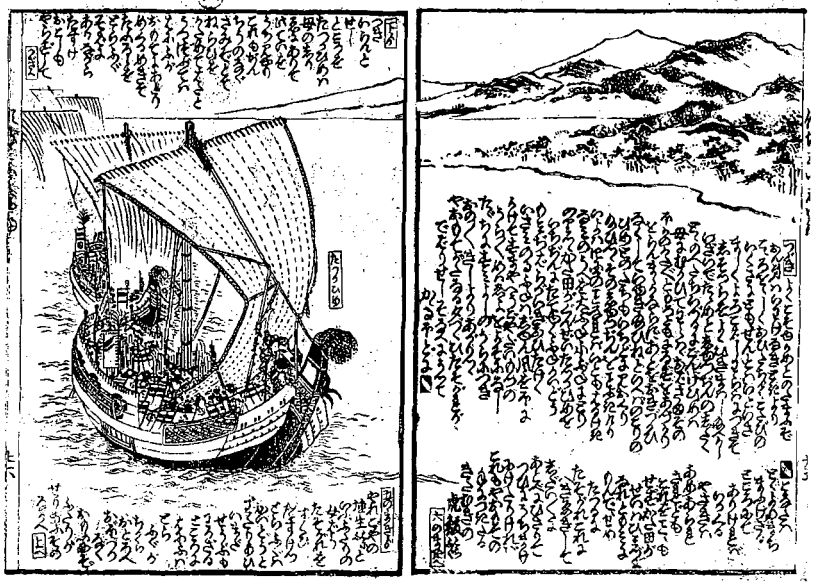
さてまた伊予の堅田が腹に、儲けたる子H／H数多あり。女の子多くして、一番を竹束姫【孫策】と呼び、二番目を、権化姫【孫権】と名づけたり。此子を懐胎右へ／左よりせし初め、堅田は夢に観音大師の、口に飛び入り給ふと見て、生まれしを見れば玉の如き、女の子なりければ、「こはまさしく日ごろより、信心し奉る、大師の権化なし給ふなるべし」と▲／▲思ひしかば、権化とは名付けたり。さて三番目を小冨士【孫翊】と名付け、四番目を玉簾【孫匡】と呼びなせり。

また脇腹の娘あり、堅田これを養ひて子とせり。そが一番目を大洲【孫朗】と名付け、二番目は男子にて、越智丸【孫仁。のちの孫夫人】と名付けたり。これより後、伊予大掾純友と、名乗れるはこの稚児の事なりけり。さて三番目を小松【孫韶】と名付け、うちも揃ひし姉妹、梅と桜のその中に、たゞ一本の男竹、末は茂りし次へ（23ウ・24オ）／続き子福者と、人皆言ひもて囃しける。此子供らが叔母なりける、堅田が妹小静【孫静】は、

（24ウ・25オ　小静、姉堅田を諫める）

姉が難波に攻め上る、戦の首途と聞しかば、堅田が前に、七人の姪甥を、誘いてたち出でつゝ、「差し出がましき事ながら、思ふ所を申さぬも、誠少なき業なれば、御怒りをも顧みず、諫めまいらす事こそあれ。今都には董根が、己がまゝを振る舞ひて、西の御殿を、蔑ろになし奉り、世の中もつとも穏やかならず。諸々の女房たちも、こゝかしこに引き退きて、己々その土地に、富貴を保ちをるが中に、此国しばらく安らかなり。しかるを此度いさゝかの、怨みを難波に晴らさんとて、自らも力を労し、士卒をも煩はさんと、なし給ふはよろしからず。願ふは姉上この事を、思ひ止まり給へかし」と、言葉忙しく諫むれば、堅田は聞てうちほう笑み、「さは思し給ふらめど、わなみ誓ひて天下に羽を延し、世を救はんとの、志あるものから、仇あるを報ひずして、空しく拳を握りつめ、あだに死するを待ちておらんや。我がする所を見ておはせ」と、□／□受け引く気色はなかりけり。

竹束姫は母堅田の、前に進みて優しげに、「妾母上に従ひて、難波とやらんに至るべし。苦しからずは将てゆ



（25ウ・26オ　堅田母子、攻め上る）

き給へ」と、言ふに堅田は嬉しげに、次へ（24ウ・25オ）／続き「よくこそ行かめと宣ふぞ。御身は稚き時より、心雄々しく生ひ立ちて、此度の戦に供せんとは、いと勇ましく喜ばし。妾に付きて士卒らを、よく引き回し給へかし。いざ出で立め」と出陣の、支度整へ立ち出づるに、権化姫は母に向かひて、「妾は叔母さまその他の、方々と諸共に、留守を預かりをらんまゝ、必ず後をお気遣ひ、なくしてい行き給ひね」と、言へば残りの姫殿たちも、一度に見送り給ひつゝ、その出陣を寿きけり。

伊予は四国の事なれば、いとも遥けき波の上を、大船小舟にとり乗りつゝ、堅田が軍勢、竹束姫を一陣に立て、行船・海棠・黄葉らが、勢ひ猛く勇み乗る、船は順風を帆に受けて、須磨や兵庫や大物の、浦々名所をよそになし、直ちに住吉の浦に着き、各々岸より上がりつゝ、矢表方なる夕づくひ黄昏が出張りせし、そなたへ討つてかゝる程に、■／■此方は疾くより待ち設けたる、所にてありければ、射かくる矢先は雨霰、されどもこれを事ともせず、堅田が勢は火水になれと、揉みに揉んで攻め立

つるに、黄昏これに辟易して、次第々々に後辺にひさりて、終に打ち負け逃げ去りければ、これも矢表の手に付きたる、北向の虎鰒【張虎】、六の巻へ（25ウ）

（六）

▼二十六丁表の図中央に、「たつかひめ」とある。

五の巻より破小屋の埴生【陳生】といふ、二人の女房黄昏を、救ひ助けつ虎鰒は、海棠と渡り合ひ、いまだ勝負も分かざる所に、埴生は虎鰒が力衰へ、覚束なく思ふにぞ、二人が競り合ふその中へ、上へ／下より突き入らんとせし所を、竹束姫は母の後方にありて、此体をうち見やり、「これも陣中の慰みぞ」とて、狙ひを固めてはたと打つ、礫は埴生が面に当たり、目くるめきて倒るゝを、虎鰒側にありながら、助け起こしもやらずして、次へ（26オ）／続きたゞ呆然と立ちてをり。海棠刀を、手斧の如く使ふと見えしが、埴生は面を、半ば削り去られしは、実に面なき半面美人、いと見にくうしておかしけれ。

行船は黄昏を、目取りて斬ってかゝりしを、黄昏いたく臆したりけん、刀も合はせずひつ返し、雑兵ばらにうち混じり、逃げて命を助かりつゝ、辛うじて、矢表が方へ来たりて、敗軍の様子を語れば、矢表は心慌てゝ「此ことを、いかゞはせん」と商議するに、比良峰は眉をう

（26ウ・27オ　竹束、埴生に礫を打つ）

ち顰め、「堅田が方には勢ひ鋭く、寨近く陣取りたり。今黄昏はいたく打ち負け、兵（つはもの）戦ふ心なく、やむ事を得ざるものから、たゞこの所を堅く守りて、彼が矛先を防がんのみ。しかせし上にて使ひを立て、秘かに初糸に救ひを乞はゞ、堅田が囲みは自づから、解けなんと思ふなり」と、言へば瑁（みくだま）座を進め、「御身が料簡極めて拙し。○／○敵方の兵（つはもの）は、間近く既に寄せてをり。たゞ手を束（つか）ねて死を待たんより、烏滸がましけれど妾また、出でて戦はん」と言ひければ、矢表これを許せしに、やがて瑁（みくだま）は手勢をひきて、荒陵（あらみさゝぎ）の山辺に出で、堅田といたく戦ひしが、またうち負けて引き退くに、比良峰は秘かに文をもて、初糸に救ひを求めけり。右へ

左より堅田が方には勝ち誇り、いよ〳〵囲みを堅（かた）うして、矢表を攻めつけたり。ある日にはかに風吹き荒れて、堅田が陣に立て置きたる、旗は風に吹き折られたり。行船堅田にうち向かひ、「こはいと悪しき祥（さが）なれば、ひとまづ戦（いくさ）を返されて、故郷に帰りおはさずや」と、言へば堅田は気色（けしき）を損じ、「女々しき事をな宣ひそ。いかで旗竿を

（27ウ・28オ　行船、堅田を諫める）

風のために、吹き折られたる程の事にて、次へ（26ウ・27オ）／続き戦を返すいはれなし」と、言ふに海棠頭を振り、「いな〳〵旗は軍中の、主とまで崇めおき、軽々しくはせざるなり」と、言ふに堅田はうち笑ひ、一風は天地の呼吸の気にて、人の出る息引く息に、異なる事なかるべし。今時は冬なれば、にはかに風の吹き荒れて、旗竿を折る類を、怪しと思ふはいと拙し。妄これまで戦をして、異なる事も異なりとせず。怪しびを怪しまざれば、怪しき事なしといふ。たゞ敵をひた攻めに、攻めよかし」とて取りあはねば、再び口を開く者なし。

かくてまた此方には、比良峰【蒯良】矢表が前に出で、「妄天文を知るにあらねど、夜な夜な星の形を見るに、将にたとへし一つの星、地に落ちんとするが如し。分野をもてこれを測るに、正しく堅田が身の上に、禍あらんと思ふにより、今出でて戦ひなば、必ず勝利あらんものを、出でて戦はんといふ者なきか」と、傍らを返り見れば、声に応じて濡鷺【呂公】と、いふ女のたち出でたり。比良峰は、喜び示して言ふやう、「わなみが指図を聞かる

（28ウ・29オ　堅田、討ち死にする）

べしや。右へ／左の上より さらば御身が手の者に、よく弓射る者を多く選みて、備へをばくり出だし、敵方に向かひなば、偽りて逃げ給へ、さて荒陵の山に入り、かのよく弓射る者をして、かねて林の内に伏せ置き、逃ぐるを追ふ者山に至らば、脇道へ入らざるやうに、いかにもして埋伏の、所へ導き誘ひ来たり、その時一度に矢を放ち、頭だつ者を射止め、雑兵を虜にせよ。しかる後合図の烽火を、上げば必ず此方にも、これに応じて合図をせん。もし追ふ兵なき時は、烽火を上ぐるに及ぶべからず。心得たるや」と期を押して、「今夜月いと暗ければ、たそがれの頃より計らふべし」と、その旨を示し合はせたり。濡鷺は謀を、授かりておし出づれば、比良峰は合図約束の、手番ひ等閑ならざりけり。

かくて堅田は此方にあつて、聞し所鬨の声、次へ（27ウ・28オ）／続き夥しく聞こえて、敵の押し来たるにぞ、余の者には聞こえも知らせず、一人手勢を引き連れて、攻め来る敵を追ひ払はんと、勇み進んで駆け出づるに、此体を見て濡鷺は、少しく戦ふ様なりしが、たちまちに

打ち乱され、しどろになりて逃げ走り、荒陵の山に逃げ入る。かねて示し合はせしなれば、かの射手どもは敵将の、今や来たると手ぐすね引き、待ちに待ちてぞゐたりける。濡鷺は偽りて、逃げ走ることなれば、上手くかの埋伏の、所まで■／■おびき寄す。堅田はかゝる事ありとは、夢にもいざや白綾の、鉢巻締めて勢ひ猛く、濡鷺を追ひかけたり。

此陵といふ山は、その形、茶臼といふ物に似たりければ、世人茶臼山と呼びなしたり。山には小石いと多くして、巌も鋭く剣に似たれば、堅田は夜の事にもあり、足踏み悩み捗らぬ、折から林の内よりして、射出す矢先は雨霰、堅田は頭を篦深に射られ、叫びもあへずうち倒れ、脳味噌流れ出づるものから、いかでかはたまり得ん、終にはかなく息絶えて、此山の夜露と共に、消えしは無慚の事どもなり。その年僅かに三十七才【▼原作の孫堅と同じ】、一期の夢は覚めにけり。

濡鷺は喜び勇み、従ひ来たる軍兵を、悉く斬り尽くし、合図の烽火を上ぐるにぞ、それに応じて黄昏・比良峰、瑁三人は、三方に手分けして、堅田が残兵を追ひ立つる、こなたには黄葉が、■／■押し来る敵の音を聞かけ、出でて黄昏と、ひたと行き合ひ戦ひしが、つひに黄昏は黄葉に、次へ（28ウ・29オ）／続き生け捕られて引かれたり。

行船は竹束と共に、堅田が行方を知らざれば、こゝかしこと尋ぬるうちに、濡鷺に出で会ひしかば、行船は、濡鷺と槍を合はせて、つゐに濡鷺を突き殺しぬ。

かくて双方、入れ乱れ戦ふ程に、夜はほの〴〵と明けはなるれば、相引きに陣を引く。竹束はもとの陣所に帰り、母は伏せ勢のために殺され、屍も首も敵のために、持ち去られたりければ、悲しみ嘆く事限りもあらねば、諸々の女房も、止めかねたる涙を袖に、拭ひもあへず見へたりけり。竹束は各々にうち向かひ、「母の屍を、持ち去る者はこれがために、恩賞を被るべきを、妾また故郷に帰りて、葬りをなす事も、得ならぬをいかゞはせん」と、涙ながらに、うち語らふを黄葉が、「母君の死し給へるは、言ふて帰らぬ嘆きにて、せん方もなき事に

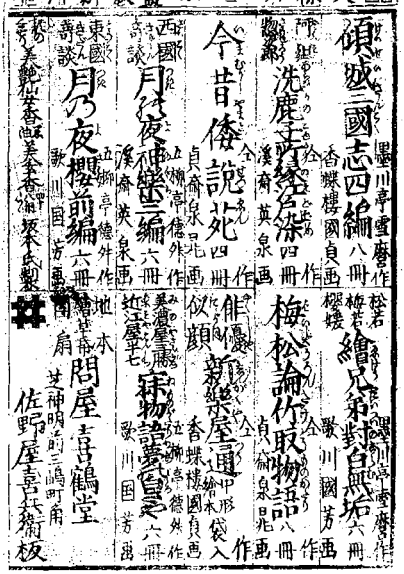
（29ウ・30オ　黄昏、捕らわれる）

こそ。さりながら御屍を、取り戻さんには手立てあり。妾今朝暁に、敵方には主立ちたる、夕づくひ黄昏と、いふ者を生け捕りたれば、人をもて敵方へ、遣はして和睦を整へ、かの生け捕りの黄昏と、母君の御屍と、取り替へん事難きにあらず」と、言ふにそばより楷【桓楷】といふ、一人の女が立ち出でて、「妾は矢表に△／△一度の、近づきになりたる事あり。今彼処へ行きこの事を、計らひ見ん」と言ひけるに、竹束喜びて右の下へ／左の上より肯ふにぞ、やがて楷は矢表が、方へ来たりてその事を、具に述ぶれば矢表が、「堅田が首も屍も共に、棺に納めてこゝにあり。早く黄昏を放ち返さば、此まゝ棺を持て往ぬべし」と約束しつゝ、双方共に和睦整ひ、楷は既に帰らんと、なしける所に比良峰は、席へたち出で、矢表が耳に口寄せ、「御身の計らひよろしからず。妾一つの仕方あり。まづかの楷を斬り殺して、後にその事を言ふべし」と、言ふに矢表楷をば、しばらく次へ退かしむ。比良峰は畳うち叩き、「堅田は妾が計らひもて、うまく伏せ勢の為に殺され、伊予には既に次へ続く」（29ウ

・30オ）／続き主たる者なし。彼が子は皆稚くて、何程の事をなし得ん。かの国いたく虚弱にして、た弱かるべき時に乗り、軍兵を引き連れつゝ、伊予に下りて攻め戦はゞ、一鼓に攻め取るべし。安く竹束を放ち帰さば、勢ひ猛くならんかし。これ此方に取りての憂へなり」と、言へば矢表頭をうち振り、「我が身難波の女伊達とて、世にも知られし者なるを、手下なりける黄昏は、捕らへられて彼方にあるを、捨て殺しにするに忍びず。人はた妾を何とか言はん」と、言ふに比良峰聞入れず、「そは余りに情過ぎて、御心弱く侍るべし。謀なき一人の乙女を、殺しぬとも千万の、此方に下へ／上より勝手よきを捨てんや。さは思ひ給はずか」と、言ふを矢表聞あへず、「わなみ黄昏と友垣の、交はりいと深かりき。これを捨つるは不義なり」と、言ふて楷を送り帰し、約せし如く黄昏と、堅田が頭と屍とを、棺に納めしそがまゝに、楷につけて取り替へけり。（30ウ）

（30ウ　比良峰、矢表に意見する）

《第三冊　後表紙封面》



▼奥目録「天保六乙未孟春新刊」。本作を右上に置き、他にも雪麿の作品を五点掲出する。この五作品は、前年のもの（本誌第五三四号一五七頁参照）にも登録されていたが、天保六年に刊行されたのは、『洗鹿子所縁江戸染』（六巻三冊）のみのようである。

《付記》

今回で、『傾城三国志』全四編の紹介を終了する。

本作に興味を抱いた当初、稿者は人物対応表を作りながら読み進めた。しかし、前回紹介した第四編上帙は、長らく所在を確認できなかったため、そこにのみ登場する人物に、雪麿がいかなる名前を授けたのか知る術がなく、複数の空欄を残したまま時日を経過したのである。

その後、佐藤悟氏が第四編上帙を入手され、その画像を早々にご提供くださったので、右の対応表を完成させえたばかりでなく、本誌において全編を紹介する目途も立った。佐藤氏のみならず、翻刻紹介をご許可いただいた名古屋市鶴舞中央図書館、福井市立図書館にも、改めて深謝申し上げたい。

本作の編述に際する雪麿の苦心については、本稿ではじゅうぶんに指摘することができなかった。この点に関しては、別稿「講史小説の翻案合巻」において、馬琴作品と対比しながら検討を加えることとしたい。

《第四冊　表紙》

乙未新刊　貂蟬【▼駒絵内。中央は本作の蟬之助】

雪麿作　国貞画　喜鶴（ノド）堂梓

傾城三国志第四編（けいせいさんごくしだいしへん）　下帙下冊

《第四冊　前表紙見返し》

乙未春新板　さん國し

佐野屋之梓　四編下帙下冊

雪麿作国貞

惠賀（花押）

▼「さん國し」の文字を組み合わせて、亀を描く。

（七）

かくて竹束は母の棺を、迎へ取りて泣く〳〵も、士卒をまとめもとの如く、船にとり乗り伊予に帰れば、双方の戦ひ止んで、難波はしばらく無事なりけり。

されば竹束は母の棺を、いと懇ろに土葬なし、七日々々の追善供養も、等閑ならず執り行ひし、孝行の程言はん方なし。かの葬地をこれよりして、石域の浜【曲阿の原】と呼びたりとなん。石棺をいしきといへれば、それよりの呼び名にして、今に伊予には石域の浜あり。

（31オ　竹束、賢女を集める）

さて無駄話はさしおきぬ。竹束姫はそれよりして、母の志を受け継ぎけん、ひと度天が下にはびこらんと、思ふ事常なれば、己を屈めて人をもてなし、世にちとも優れたる者を、手につけんと▽／▽思ふに、いづれもその徳行なるを、慕ふものから次第々々に、伊予を指して集まり来たるは、賢き女の才なりけり。

こゝに又董根は、その身西の御殿にありて、堅田が死たる由を聞、傍らの者に言ひけるは、「妾に一つの憂へを省きぬ。その子が年は幾つぞ」と、問ふに傍らに侍る者、■／■「十七也」と答ふるに、董根につことうち笑ひ、「嘴　青き小女郎なり、心に掛くる者ならず」とて、これよりますます〳〵驕り強く、姫上はある甲斐なしにて、いと哀れなる御様なり。己が妹秋空【董旻】に、また重き位をつけ、姪なりける、小波【董璜】といふ者をも取り用ひ、その余の親　族の男女は、年長けたるも稚きをも、選まずしてみなかたへに使ひて、驕りの限りを尽くせしが、なをそれにても足らずやありけん、十万余りの

（31ウ・32オ　董根、驕りを極める）

人夫をかけて、西の御殿と等しかるべき、別館を嵐山に次へ（31オ）／続き営み、これを嵐の館【鄙塢城】と名付けたり。その美麗は御殿に増すとも、劣るべうは見へざりけり。こゝには塗り籠めを、幾戸前となく建て連ねて、金銀はいふに及ばず、綾錦その余色々の、あるとあらゆる宝物の、数を尽くして積み入れ積み込み、米の俵をうち重ねて、下へ／上より二十年の糧を貯へ、限りもあらぬ富を極めつ。それのみならず洛中洛外なる、町人百姓が家にある、美少年の年二十以下、十五以上の者としいへば、皆呼び取りて側近く、召し使ふその男子の数、およそ八百人に及びけり。董根常に言ひけるは、「我が望み成就したり。これにて老いを養はゞ、事欠けたる事あるべからず」と言ふも理、西の御殿に仕へ奉る、諸々の女房らは、皆姫上より、董根のみを□／□恐れ敬ひ、心に違ふ者はなし。

ある日、かつら井の清見が妻大嵩【皇甫嵩】は、次へ（31ウ・32オ）／続きかの嵐の館にて、董根に対面す。董根つら〳〵うち見やり、一大嵩主には今日に至りて、

（32ウ・33オ　大嵩、董根に追従する）

誠にわなみに服しつらん、いかゞ」とあれば大嵩は、頭を下げて恐る〳〵、「いかさま妾御局ののの、勢ひこの場に至らんとは、かねては思ひがけざりき」と、言ふに董根あざ笑ひ、「例ひば鴻鵠の大鳥は、もとより大きなる志あるを、たゞ雀燕の、これを知らざるのみなり」と、言ふに大嵩、「いかにもさなり。さる頃妾も局と等しく、皆鴻鵠と思ひの外、局は早く鳳凰と、なり給ふこそ畏けれ」と、言へば董根機嫌よげに、「実に御身我が事を、さは言ふなるや」と押し返せば、大嵩はなほ慇懃に、「御身徳をもて姫上を、助け給ふそが上に、胸広くして人を容るゝを、誰かありて敬はざらめ。もし辛き掟、厳しき仕置きをなし給はゞ、天が下皆謹み恐れなんを、何として妾一人、背き参らす道理はあらず」と、心にあらでもせん術なく、お髭の塵をとり〴〵に、ちり〳〵恐るゝうたてさよ。

▼この皇甫嵩の追従は、正史『三国志』董卓伝の裴松之注に由来し、李卓吾本『三国演義』にも見えるが、『通俗三国志』では省略されている。

（33ウ・34オ　天文博士、凶兆を言上する）

董根常に御殿に仕ふる、諸々の女房らを、呼び集へつゝ、酒を酌みて、楽しむ事しば〳〵なりしが、ある日己に従はずと、聞こえし男女を五六十人、召し捕らへてかの酒の座にて、その者の手足を斬り、あるひは眼をくり出だし、あるひは舌を裂き割りなどし、あるひは大鍋にてこれを煮るに、生きもやらず死にもせぬ、大勢の者どもは、右へ／左より手をすり頭を地に着けて、「命を助け給へかし」と、嘆き悲しむありさまは、かの地獄変相の絵に罪人が、牛頭馬頭に責め苛まれて、泣き叫ぶに異ならず。これを見たりしもろ〳〵の、女房らは戦き恐れ、〇〇／〇〇「あ」と魂消るべき声をも失ひ、人の顔色はなき中に、董根はさしも胆太き、悪人にてありければ、飲み食ひなして笑ひ楽しみ、なをも杯の数重なる。諸々の女房たちは、罷らん事を聞こふるにぞ、董根はほう笑みて、一わなみ世に悪心の者を、生けおかじとするに、御身ら何どてかくまでに、恐れ給ふ事やはある」と、言ひつゝ、あなたに人あるを、顧みれば天文博士、何某が末座に出で、「それがし天文をうかゞふに、黒気天にたち上れり。

（34ウ・35オ　調布、温井の首を千束に示す）

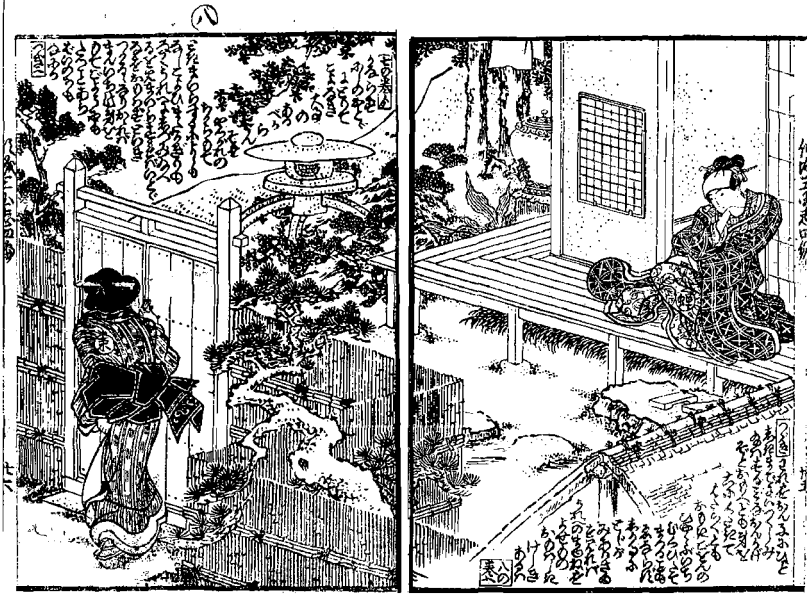
いとよからぬ兆しなれば、上に立つべき方様は、御慎みしかるべし」と、申し捨てて退くうち、玉川の調布【呂布】が、出で来たりて董根の、■／■耳に口寄せ何やらん、うち囁けば董根は、頷き〳〵吐息を吐き、「もとよりさもあるべきか。それ計らへ」と、調布に目をくはすれば、調布はずんど立ちて、席の上に連なり座したる、温井の局【張温】が、次へ（32ウ・33オ）／続き襟髪捕らへて引き立て〳〵、次の間に入るよと見へしが、やがて一人の腰元が、目八分に持ち出づる、台の上には温井が斬り首、生血滾々と滴るを、諸々の女房らが、眼先にさし置きたり。調布は衣裳を替へ、出で来たりて女房らに、かの首をさしつけて、「この首を肴にて、酒を勧め参らすべし」と、人毎に言ひ知らすれば、人々魂身に添はず、何と答ふる言葉なく、顔を見合はすばかりなり。

董根は此体を見て、心よげにうち笑ひ、「人々驚き給ふまじ。温井の局は色糸と、共に謀りて妾をば、殺さんと目論みつゝ、文認めて使ひにもたらし、色糸に送らんとせしを、誤ちて我が娘、調布の所へ持て来ぬ。さるか

ら悪事顕れて、かくの如くに殺されぬ。我その親族までを、平らげんと思ふなり。御身ら妾を母の如く、また主君の如くに思ひて、よく仕えなば殺すに及ばず。もしその如くなさゞれば、かの温井を見習ふべし。天道の助け給ふ人なれば、もし刃向かふ者あれば、たちどころに滅び失せなん。よくその旨を心得られよ」と、言へど人々ひと言の、応へもなし得ず恐る〳〵、まづその席を退出けり。

その内に、あて文の千束【王允】も加はりゐたりしが、家に帰りてつく〴〵と、一人思案を巡らせば、「今日館にて、董根が振る舞ひは、憎みてもなほ●●／●●余りある、仕業にて心安からず。いかゞなしてん」とばかりに、思ひ屈してゐたりしが、「心紛らす事もや」と、露地下駄足に引きかけて、庭のおもてにたち出でゝ、眺むれば空の色さへも、涙催す雨模様、かき曇りてはいとゞなほ、胸晴れやらずうつとりと、柴垣のもとにたゝずめば、垣のあなたの亭座敷は、さゝやかなれど様々に、数寄を尽くし手を尽くし、営み建てし小座敷にて、常には人の出で入りも、許さゞりしに誰やらん、縁端にたゝずみゐて、吐息吐きつゝゐたりけり。

千束は垣の隙間より、次へ（33ウ・34オ）／続き秘かに窺ひ見てあれば、日ごろ恵みをかけてとらせし、都にその名いと高き、花村蝉之助【貂蝉　▼板本では「助・介」両様あるが、本稿では「助」に統一した】といふ舞台子なり。此美少年は稚きより、上村吉弥【▼四代目までは「うえむら」。雪麿の念頭にあったのは、宝暦ごろの四代目か】が弟子となりて、俳優の道を学びしが、その性賢しかりしかば、たちまちに上達なし、品よき舞ひぶり色よき声ざま、琴胡弓の調べまで、誰々も愛で惑ひ、もて興ずる歌舞伎若衆の、器量骨柄品容、たち並ぶべき者もなく、その年わづかに十八才、千束は常に慈しみて、己が子の如く扱ひけるが、この夜彼が憂ひありて、嘆息せるその体を、やゝ久しく窺ひて、疑ひ思ふ所あれば、此方より声かけて、「やよ蝉之助、何をか憂ふる。己私の恋をもて、いたく辛苦をなせるよな」と、声かけられて蝉之助、思ひ寄らねばうち驚き、千束の傍ら近く



（35ウ・36オ　千束、蝉之助を見とがめる）

来たりて、「こは勿体なき仰せなり。もとより僕（やつがれ）私（わたくし）の、色に迷ひし覚えなし。そをかくまでに驚かし給ふは、御心違（みこゝろたが）へなるべし。罪がましき事ながら、御怨（おん）みの限りにこそ」と、恨めば千束は片頬（かたほ）笑み、「御身色にほだされずは、何をもて更闌（かうた）けしに、右の下へ／左の上より出入りも許さぬ此小座敷に、入りつゝ人を怨み顔に、吐息を吐（つ）きて嘆くやらん。その訳聞かめ、いかにぞや一と、言へば蝉之助座をすり寄り、「僕（やつがれ）が心の底を、打ち明けて告げ参らせん」と、言ふに千束も声をば潜め、一しからば隠さず物語りて、この疑ひを晴れ給へ」と、言はれて蝉之助手を支（つか）へ、「僕（やつがれ）賤しき身をもちて、厚き恵みを蒙（かうむ）りつ、歌舞伎の技を習ひ得て、これまでになりたるも、次へ（34ウ・35オ）／続き我（おん）を御子に等しきまでに、慈しみ給はする、皆御陰（おんかげ）とぞ思へども、身を粉（こ）に砕きて働くとも、重き御恩の百分一（ひやくぶいち）、報ひ奉る事も得ならず。しかるに刀自（とじ）が御有様（みありさま）を、見れば憂への眉根を寄せ、物思はしき気色（けしき）あるは、八の巻へ（35ウ）

（36ウ・37オ　蝉之助、千束に赤心を明かす）

（八）

七の巻より　必ず西の御殿にとりて、こよなき大事のあるべからん。そを僕の力もて、解き参らするに由もなし。今宵また限りもなく、憂へに沈み給へるを、見参らすればいとゞなを、思はず吐息吐かるゝなり。かゝれば万一此身をもて、御用にも立つ事あらば、命も何か次へ（36オ）／続き　厭ふべき」と、聞いて千束ははたと手を打ち、「まことに思ひがけざりしが、西の御殿の御上は、御身が手の内にこそあれ。しからば妾もろ共に、あれなる人なき一間へ来たれ」と、誘ひたてて一間に入り、なを人もや窺ひ聞かんと、腰元どもを遠く退け、さて蝉之助を座に直らせ、己は頭を畳に擦りつけ、数多度額づけば、蝉之助は驚き慌て、畳に倒れ伏しながら、「何の故もてかくまでに、僕を拝し給ふや。心得ず」と訝れば、千束は頭をうち擡げ、■／■「御身世の諸人を、憐れみてよ」と言ひながら、涙の川は早瀬にて、袖の柵止めかぬるを、蝉之助はやゝ不審晴れず、「先に僕命をも、厭はずとこそ申しつれ。いかなる子細か問はまほし」と、

（37ウ・38オ　千束、蝉之助に連環計を語る）

言はれて千束は胸撫でおろし、「今世の中の危ふき事、鳥の子を重ぬるに似て、さみ【▼「きみ（君）」の誤であろう】も家来も安堵せず。こは御身が力ならずは、よく救ふ事あるべからず。その訳は賊婦董根、西の御殿の御勢ひを、奪ひて御位を盗まんとす。されども館の内にある者、誰かこれを滅ぼすべき、謀を施し得ん。わなみつら〳〵思案するに、かの董根が手について、傍らをしばしも離れぬ、調布といふ娘あり。男勝りの力ありて、又勇気もいと逞し。さりながら次へ（36ウ・37オ）

／続きかの二人を見るに、色と酒とに溺れては、性根なき者どもなり。こゝに一つの謀あり、まづ御身をもて、調布に許し与へば、調布は、必ず御身の美しき、男振りになづみなん。そをまた秘かに董根にも、分かちて媚びを献じなば、さしも色好みなる性なれば、いかにも忍びがたくして、彼また御身を愛すべし。しかる時御身また、その中にありて計らはゞ、必ず母子の仲を裂き、調布をもて董根を、殺さしなば自づから、大悪人を滅ぼして、西の御殿を助け参らせ、上下息を吐くものならば、皆全

（38ウ・39オ　調布、千束を訪ね来たる）

く御身一人が、力にて手柄いと大きし。二人相持ちの男妾の、如くなるを厭はずは、此言葉に従ひてよ。御身が心いかにぞや」と、問ふに蝉之助答えて言ふやう、「僕先に命をも、厭はずとこそ申しつれ。今改めて腹の内を、聞かし給ふは心似ず。そはとまれかくもあれ、右へ／左より刀自が仰せの如くにせん事、僕自づから手立てあれば、御心安くおはせよ」と、言ふに千束はさらにまた、声を潜めて言ひけるは、「もし此事の他に漏れば、わなみが一門一家は皆、根を断ち葉を枯らされん。必ずな漏らし給ひそ」と、言ふに蝉之助うち頷き、「いたくな御心使はせ給ひそ。僕これまで受け得たる、御恩を報ひ奉らずは、死して畜生道に落ち、生々世々も人間に、生まるゝ事あるべからず」と、固き誓ひに喜ぶ千束、「必ず秘すべし〳〵」とて、口を固めつ嬉しさを、言ひ述べんさへ憚る人聞き、よろづ心の底に籠め、その夜は早く蝉之助を、臥させて己も枕に就き、次の日家に貯へ持てる、珊瑚瑪瑙水晶の、玉を出だして簪の、飾りにつけさせ玳瑁の、櫛笄の雅を旨とし、当風に格好せしを、

（39ウ・40オ　蝉之助、調布と対面する）

使ひに秘かにもたらして、調布の許に送りやるに、彼喜ぶ事限りなく、直ちに千束が家に訪ひ来て、その志の厚きを謝するに、次へ（37ウ・38オ）／続きいと懇ろなりければ、千束は又調布が、必ず来たらん事を測りて、よき酒肴・菓子なんどを、備へて■／■待てば推察の、如く果たして訪ひ来れば、千束は奥深きひと間へ導し、様々にもてなしつゝ、その扱ひいと懇ろなれば、調布喜ぶ事大方ならず、杯の数重なりて、右へ／左より酒酣に至りし頃、千束は腰元・婢を、みな退かして五七人の、稚小姓をのみ残しとゞめつ、彼らに酌を取らするのみ。

しばらくありてかの稚児に、向かひて▲△／▲△千束は囁き示し、「かの子をこゝへ呼びもて出だして、調布主に参らする、酒の肴に備へてん」と、言へば稚児らはかしこまり、次へ（38ウ・39オ）／続き次へ立ちしがしばらくありて、蝉之助を伴ひ出づ。蝉之助は今日を晴れと、粧ひ飾る振袖の、色も映えある紫は、絵にも書きつよ皆人の、許しの色の帽子さへ、野郎と呼ぶはいと惜しく、女にしても見まほしき、優しき姿艶めきし、留奇南の香り

梅ならば、花の兄分弟に、なして契らん朝顔の、盛り短き色とても、厭はしからぬ美少年、にこやかに座に直り、慇懃に額づけば、調布はこれを見て、「こは誰人にて何とか呼ぶ、その名をこそは聞かまほし」と、問へば千束は指ざし示し、「こは妾が腹は貸さねども、産みの子に等しき倅にて、花村蝉之助と呼ばれたり。彼をこゝへ呼びたるは、御身をもてなし参らせんに、せん術の尽きたればなり。こや倅よいかにして、酒をば勧め参らせざる。疾く〳〵せずや」と急がせば、蝉之助は改まりし、杯を調布に、もらはん由を促すに、調布はしけ〳〵と、蝉之助が顔うちまもる、目は瞳さへ動かねば、千束はそれと推したる、体にもてなし言ひけるは、「やよ倅、調布ぬしは、はやいたく酔ひ給へるに、強いて酒を参らせんは、心なきに似たるべし。御心に右の下へ／左の上より任しておきね」と、言ふに調布蝉之助を、己がかたへに呼び近付くれば、空辞ひする蝉之助を、千束は見るよりうち笑ひ、「この主は妾が為に、いたく恩ある人様なれば、御かたへに近く寄るとも、何の妨げあるべきか」と、言ひつゝ千束はうち笑みながら、戯れの如くもてなしつゝ、「妾この倅をもて、御身の稚小姓に参らせん。苦しからずは腰元にて、かたへの用事を足さし給へ。この事受け入れ給はんか」と、言へば調布思ひがけなく、喜びに堪へずやありけん、「あ」と言ひながら頭を下げて、伏し拝み〳〵、「もとより妾が願ひなり。もし此事を許されなば、犬馬の労もて恩に報はん。喜ばしや」と小躍りすれば、千束も「謀りし事成りぬ」と、腹の内に喜びて、再び酒を勧めつゝ、次へ（39ウ・40オ）／続き「早くよき日を選みなば、御身の方へ参らすべし」と、言ふに調布限りなく、喜ぶ上に十分の、酒気を帯びたる女子の癖、艶めく心兆しつゝ、しきりに蝉之助が顔うち見れば、此方にもまた秋の波、目もとの潮はうち寄する、波にこへたる舞台子の、愛嬌深き顔つきに、情けを送れば調布は、うつゝ抜かしてゐたりけり。

千束は「もはやよき程ぞ」と、「今日しも障りなきならば、調布主を留め参らせ、我が家に寝まり給ふべしと、言ひたけれども董根の、刀自にもし疑はれば、何をもて

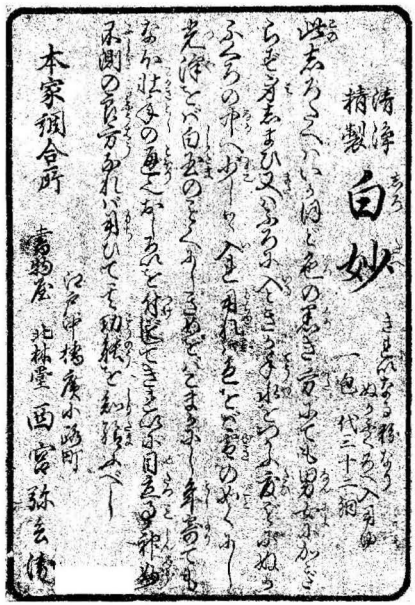
言ひ解かん。それ故にこそ留めぬなり」と、●／●言へば調布本意なげに、帰らんとして様々に、もてなされたる礼を述べ、暇を告げて蝉之助に、心残して帰りけり。

吉例御披露。世間無類、御顔の薬白粉、美艶仙女香。同白髪染め薬、黒油美玄香。右両品とも相変はらず、御求可被下候。京橋南伝馬町三丁目　坂木氏製

墨川亭雪麿作　香蝶楼国貞画　清書金川

（40ウ　調布、蝉之助の色香に迷う）

《第四冊　後表紙封面》



▼「清浄精製白妙」広告。本稿冒頭で触れた教団氏所蔵の第三冊は、巻末に奥目録（一五三頁参照）ではなく、この「白妙」広告を置く。

（かんだ・まさゆき　法学部准教授）